

「分ける」制度今も

知事応接室の「占拠」から丸20年がたった2008年、日本ボランティア学会の学会誌に「マツリのようなたたかいたい」と題した論文が掲載された。執筆者は、当時9歳の少年として「占拠」に立ち会った猪瀬浩平さん(37)に聞いた。

猪瀬さんの兄は知的障害者で、地元の小中学校に通い、県立高校への入学を希望した当事者。小学4年だった猪瀬さんも両親に連れられて県庁に行った。

「占拠」3日目の夜、父良一さん(67)と同僚が、知事応接室に現れた教育長らをただす様子が、関係者のニュースレターに記録されている。

希望し「占拠」に加わった3人の子供たちは氷山の一角。他にも高校浪

人を強いられている子、やむを得ず養護学校に行っている子は多い。同世代の子供たちが、どう地域で育っていったら良いと思うか。

父ら当事者の両親の険しい表情や、ずらりと並んだ車いす、聞き慣れない言語障害の人たちの声が、浩平さんの記憶に焼き付いた。

知事応接室を「占拠」した人々



5

組織や個人 つないだことに意義



見沼田んぼ福祉農園の代表を務める猪瀬良一さん(左端)と浩平さん(右から2人目)、山口裕二さん(右端)＝さいたま市緑区で

とを挙げる。身体障害者」と知的障害者「教育」を求める子どもの障害者と、「福祉」を求める大人の障害者。県庁と市民

「占拠」について振り返るようになったのは、大学3年の頃。「障害者を、従来と違う問題意識で捉えたい」と考え、大学院に進んで研究することにした。兄らの働く場

「占拠」について振り返るようになったのは、大学3年の頃。「障害者を、従来と違う問題意識で捉えたい」と考え、大学院に進んで研究することにした。兄らの働く場

「占拠」について振り返るようになったのは、大学3年の頃。「障害者を、従来と違う問題意識で捉えたい」と考え、大学院に進んで研究することにした。兄らの働く場

「占拠」について振り返るようになったのは、大学3年の頃。「障害者を、従来と違う問題意識で捉えたい」と考え、大学院に進んで研究することにした。兄らの働く場

通い、泊まり込みのキャンプにも参加。農園で知り合った自閉症の男性の介助も始め、日常的に障害者と接するようになった。

山口さんは「健常者とされる人にも意思疎通しづらい人はいるし、健常者と障害者の間に、あまり隔たりは感じない。浩平先生も含め『面白い人が居る場所』だから農園に来ている」と話す。

相模原市で先月起きた「津久井やまゆり園」事件で、容疑者が「役に立つ人間」と「役に立たない人間」を分けるような供述をしていると知り、改めて嫌悪感を覚えた。

「役に立つ」「役に立たない」で分ける人たちは、実は多いと思う。こんな事件が起こるような世の中であってほしくない

「占拠」というセンセーショナルな出来事を経ても、施設入所や特別支援教育といった「分ける」システムはなくなるなら

「奥山はるな」
おわり



山間地の坂道で第1金曜日の2日に行われた販売にも大勢の地域住民が訪れた

飯能・東吾野地区 巡回販売が好評

福祉団体、車で月1回

飯能市の東吾野地区の福祉を推進するグループ「ふくしの森・東吾野」が7月から、軽自動車を使った巡回販売を試験的に行っている。65歳以上の高齢者が39・4%の同地区は坂道も多く、「家の近くまで巡回販売車が来てくれて便利」と地域の若年寄りから感謝されている。

同グループ
会福祉協
ワゴン車
今年度は
毎月第1
販売を行
上戸一
瀬尾一
白子で、